

被災地に幽霊…?
生と死に向き合う一冊

新曜社/2376円

東日本大震災から5年。この「5年」というのは一つの区切りの意味を持つようで、関連図書が出版が相次いでいる。その中でも注目の本が東北学院大学、金菱清ゼミナールが行った「震災の記録プロジェクト」をまとめた本書である。このゼミの学生と指導教官である金菱清が、被災地における問題が生存(survive)から、生活(live)にシフトしようとしている2013年から始めたものだ。

この5年間、被災地では何が行われ今に続いているのか。政府やマスコミ、インターネットからの情報しか知らない人たちは、この事実には驚かされるだろう。

石巻市や気仙沼市で多く見られるという幽霊現象。実際にタクシーに乗せたという経験を持つドライバーに直接インタビューを行った。彼らは乗車させただけでなく、会話もし

ている。初夏に厚いコートを着て乗り込み、いつの間にか消えてしまう。乗車記録が残る未収金となる。若い人が多いのも特徴のようだ。ドライバーたちは怖がるわけではなく、その存在を受け入れる。古くから日本人がしてきたことと同じだ。

おびたしい数の震災慰霊碑が建立されているが、旧閑上中学校では死者を慰め悼むのではなく、彼らが生きていた証を記憶するための新たな試みがなされている。

津波被害の象徴ともなった南三陸町の防災対策庁舎。「震災遺構」として残すか、遺族の心を思い解体すべきか。広島原爆ドームの保存の視点からこの問題を探っていく。

先祖供養のためのお墓に関する問題も見逃せない。全てが流された地域では、人々の心が休まるように新しいお墓の形が生まれ始めている。

本書では、報道されなかったヒーローたちの姿も紹介されている。672ものご遺体が仮埋葬として土葬にされた現場で、あらためて掘り起し、火葬にしていく作業について葬儀社の9人だけのチーム。

津波のデッドラインにあたる水門の閉鎖を行った消防団の人々。

そして終わりの見えない原発事故の後始末。その一端として、野生動物の駆除にあたる猟友会が紹介される。高い放射線量が検出されるため、食べることもできない野生動物を殺生する意味と誇りは何か。

取材者の多くは東北出身者で、高校3年に進級する春に震災を経験した。それだけに東北地方に貢献したいという思いが強いという。自分たちの手で震災の記録が編まれたことは、自信となり力となるに違いない。多くの人に知ってほしい一冊である。

『呼び覚まされる
3.11 生と死のはざままで』
霊性の震災学

金菱清(ゼミナール)・編

かねびし・きよし 1975年、大阪生まれ。東北学院大学教授。専門は環境社会学、災害社会学。主な著書に「震災学入門」「3.11働きの記録」「震災メモリー」等。

評者 東 えりか
書評家